

異世界の劇場の楽屋に
転生した元プログラマ
ーの Ω が座長 α に「お
前の声が俺を発情させ
る」と初舞台の後に α
覚醒した座長に舞台裏
の暗がりでカントを貫
かれて番にされる話

「シノ！」

ヴェルトの声が飛んでくる。低い、地を揺るがすような声。その振動が鼓膜を素通りして脊髄を直接殴りつけた。

「っ——あ……♡」

おかしい。声を聞いただけで下腹が脈打っている。プログラマーだった三十一年間の人生で、こんなバグは経験したことがない。

衣装の裾が汗で肌に張りつく。舞台の照明が白く眩しい。客席は七割の入り。カーテンコールの拍手がまだ鳴り響いている。なのに俺の意識はとっくにそこから剥がれていた。

（下腹が——熱い。内臓がずれてる感覚——いや、ずれてるんじゃない、増えて——）

ありえない。

男性器の後ろ、会陰部に、じわりと「何か」が開いていく感覚。

体勢が崩れかけた俺を、ヴェルトが劇中の動きに紛れさせるように抱き止めた。190の身体が覆い被さるように屈み、腕が背中に回される。客席からは芝居の一部に見えただろう。

「……おい、お前すごい熱だぞ。何が——」

至近距離の低音。耳の奥に流し込まれるそれだけで、股間がきゅう♡と締まった。

「はっ……♡近づかない、で……っ」

拍手が鳴り止む。幕が下りる。袖に引っ込んだ瞬間、俺はヴェルトの腕を振り払って走った。

廊下。階段。地下へ。楽屋を通り過ぎ、奈落の入り口を開ける。舞台装置の格納庫。非常灯の橙だけが錆びた鉄骨を照らしている。打ち上げが始まれば団員は上に集まる。ここなら誰も来ない。

壁にもたれ、ずるずると崩れ落ちた。

股に手を当てる。

「……嘘だろ」

——ある。

男性器の後ろに、指先が沈み込む場所がある。柔らかくて、熱くて、ぬるぬるに濡れていて、指を押し当てただけで腰が砕けそうな——

「デプロイ前に仕様変更するなって言っただろうが……っ」

声が震える。涙が出る。前世で三十一年間、今世でも二十年間、俺は男だった。男性器しかなかった。それが——今、指の腹に触れているこの裂け目は何だ。存在しないはずの穴から液体が溢れて、指を伝い、内腿を流れ落ちていく。

(バグだ。バグだ。この身体にランタイムエラーが発生してる——パッチを当てなきゃ——でも魔石は砕けた。封印がない。ロールバックできない——)

ぐちゅ、と音がした。

俺の指が——勝手に、沈んでいる。

「あ……っ♡♡ な、に……触っただけで……こんな……っ♡♡」

指一本分。中が締めつけてくる。熱い。身体の内側がうねるように蠢いて、指を呑み込もうとしている。

「やだ……っ、抜け……俺の、手……っ♡」

自分の手が自分の身体に沈んでいくのを止められない。掌が痙攣している。指先が内壁を撫でた瞬間、腰の奥から電流みたいな快感が跳ね上がって——

「おお……っ♡♡♡ う、そ……なんで、こんなに……っ♡♡」
——そこに。

足音が響いた。重い、一人分の足音。奈落の階段を降りてくる。

匂いが先に届いた。焦げた蜜のような、重く甘い匂い。鼻腔に触れた瞬間、身体の内側が痙攣した。指を突っ込んだままのそこが、きゅうう♡♡と締まる。液が溢れる。匂いだけで。

「シノ」

暗がりの中で、ヴェルトの目が光っている。橙色の非常灯に照らされた虹彩が——縦に、裂けている。

「来ないで……っ♡ 近づかないでください……っ♡♡」

「お前から、とんでもない匂いがしてる」

「いいから来ないで……っ♡♡ 今の俺おかしいんです……身体が……変わって……っ♡♡」

ヴェルトが跪いた。舞台装置の鉄骨に片手をかけ、指が白くなるほどの力で掴んでいる。自分を繋ぎ止めている。まだ——理性の糸が繋がっている。

「お前の声が——俺を発情させる」

「え……？」

「舞台の上から、ずっとだ。お前が台詞を発するたびに俺の中の何かが暴れる。今日、やっと分かった」

（発情——？ この人も——？）

ヴェルトの呼吸が荒い。額に脂汗が浮いている。190の身体が——一回り膨張したように見えた。筋肉が服の下で軋んでいる。犬歯が唇の裏を切ったのか、口元に血が滲んでいる。

「お前——身体が、変わったのか」

俺は泣きながら頷いた。

「さっきまでなかったんです……こんなの……っ♡♡ 俺は男なのに……三十一年間男だったのに……っ♡♡」

三十一年の意味はヴェルトには伝わらない。でも俺の恐怖は——伝わったらしかった。

ヴェルトの大きな手が俺の手首を掴んだ。片手で両手首を束ねられる。節の浮いたプログラマーの手なんか、この手の前ではあまりに貧弱だ。

「見せろ」

「嫌です……見ないで……っ♡♡」

衣装の裾がたくし上げられる。非常灯の橙色が、俺の下腹を照らした。

男性器の後ろに——柔らかく開いた裂け目。縁が赤く充血して、透明な液が絶え間なく溢れている。ついさっきまで存在しなかったもの。

ヴェルトの呼吸が、変わった。

「……お前が怖がってるのは、こいつが自分のものだって分からないからだ」

掴まれていた手首が解放される。代わりに俺の右手を取られた。大きな掌が俺の細い指を包み、そのまま——

「自分で触れ」

「嫌だ……っ♡♡ 触りたく……っ♡♡」

「触れ。——お前の身体だ」

ヴェルトの手に導かれて、俺の指先が——自分のそこに触れた。

「ひ……あ……っ♡♡♡」

柔らかい。さっきよりもっと、ぬるぬるに濡れている。肉の褰が指に纏わりつく。触れただけで腰が跳ねた。

「そのまま、開いてみろ」

「むり……っ♡♡ 自分で開くとか……そんな……っ♡♡♡」

「できる。ゆっくりでいい」

ヴェルトの指が俺の指に重なった。二人の指が絡まった状態で、裂け目を上から下へなぞる。俺の細い指が肉襞を押し広げ、ヴェルトの太い指がその奥の粘膜に触れた。

「お……っ♡♡ 奥……っ♡♡ 敏感すぎ……自分の指なのに……っ♡♡♡」

（認めたくない。気持ちいいなんて認めたくない。三十一年間男だった俺の指が、俺の身体の中に沈んでいく。こんなの——こんなのバグだ。俺の仕様にはない——）

ヴェルトが俺の手を離した。そして自分の中指を——ぬるり、と押し込んできた。第一関節が沈む。

「ッ……♡♡♡ 入って……指が……っ♡♡」

「力を抜け」

「む、無理です……っ♡♡ 初めてなのに太い……指がごっごつして……っ♡♡♡」

中指が奥へ進む。壁が締めつける。溢れる液が全部を滑らかにして、根元まで呑み込まれた。内壁を探るように指先が曲がる。

「ここか」

一点を擦られた瞬間——喉から、舞台では一度も出したことのない声が漏れた。

「おおおおっ♡♡♡♡ そこ……だめ……っ♡♡ 頭おかしくなる……っ♡♡♡」

「……声を抑えろ。上に聞こえる」

「む、り……っ♡♡ 抑えられな……お……っ♡♡ 指、動かさないで……っ♡♡♡」

動きが止まる。でも指は中に入ったまま。内壁がヴェルトの中指にきつく張りついている。俺の意思とは無関係に、中が蠢いて、吸い付いている。

（やだ……♡♡ 身体が勝手に……指を締めてる……♡♡ 離してほしいのに、中が離してくれない……っ♡♡♡）

ヴェルトの額に汗が浮いている。鉄骨を掴む手が震えている。

「……シノ。俺の身体もおかしくなってる。指を入れてから——止められなくなりそうだ」

その声に——弱さがあった。舞台の上では絶対に見せない、怯えに似た揺らぎ。

直後、頭上の舞台板を通して声が降ってきた。

「シノどこ行った？」「座長もいないぞ」「なんか甘い匂いしない？」「月蝕の子がいるのか？ まさか劇場に？」

ヴェルトの目が変わった。

弱さが消えた。代わりに——獣の目。独占の色。

指が引き抜かれる。ぢゅるっ♡♡と卑猥な音がして、液が糸を引いた。

次の瞬間、俺は抱え上げられていた。190の身体に軽々と持ち上げられ、奈落の最深部——せり出し機構の格納庫の奥に運ばれる。埃と油と錆の匂い。頭上の板の隙間から細い光の線が一条だけ落ちている。

「ここなら匂いが漏れない。——俺のフェロモンでお前の匂いを覆う」

ヴェルトの身体から、重く焦げるような甘い匂いが噴き出した。αフェロモン。鼻腔を焼く。脳髄が蕩ける。膝から力が抜けて——もう立ってられない。

「ひ……う……っ♡♡♡」

床に崩れ落ちかけた俺を、ヴェルトが台座の上に仰向けに押し倒した。舞台装置の木製の台。背中に冷たい板の感触。でも身体は燃えている。ヒートの第二波。二年分の封印の反動。第一波の比じゃない。

全身の皮膚が泡立っている。どこを触られても声が出る。触られなくても声が出る。あの存在しなかったはずの場所から——分泌が加速して、太腿を伝い、台座の板に滴っている。「たすけ……て……っ♡♡ 身体が……勝手に……っ♡♡♡」

腰が持ち上がる。自分で持ち上げている。ヴェルトに向かって——腰を差し出している。嫌だ。俺はそんなことをする

人間じゃない。三十一年間プログラマーとして生きて、デスクの上で冷たくなった人間が、こんな——

「やだ……っ♡♡勝手に腰が……っ♡♡自分で止められない……っ♡♡♡」

（本能だ——Ωの本能が俺の身体を乗っ取ってる——制御を奪われてる——ルート権限が——）

ヴェルトが衣装を剥いだ。乱暴に。ボタンが飛ぶ。ヒートで上気した肌が一条の光に晒される。男性器はある。その後ろに——完全に開いたカントが、ひくひくと蠢いて液を垂れ流している。

「……綺麗だ」

「綺麗じゃない……っ♡♡こんなの俺のじゃない……っ♡♡♡」

「お前のだ。——全部、お前の身体だ」

ヴェルトが自身を衣服から解放した。

息を呑んだ。

α覚醒で膨張した性器。太く、長く、熱で赤黒く染まって反り返っている。根元に——通常ではありえない膨らみ。ノットの原型。まだ完全には膨張していないが、異様な存在感。

「む……り……っ♡♡そんなの入らない……っ♡♡♡」

「入る。お前の身体がそう作られてる」

「やだ……っ♡♡ 俺の身体はそう作られてない……っ♡♡ 三十一年間、こんなもの——」

先端がカントの入り口に触れた。

「お……っ♡♡♡♡」

触れただけ。まだ入っていない。なのにカントが吸い付くように開いた。入り口が蠢いて、先端を咥え込もうとしている。身体が——招いている。

「ほら。お前の身体が、俺を入れようとしてる」

「嘘……っ♡♡ そんなの嘘……っ♡♡♡」

嘘じゃない。自分でも分かっている。中が疼いて、空っぽで、何かで埋めてほしくて狂いそうだ。でもそれを認めたら——三十一年間の自分が全部消える。

ヴェルトの手が俺の腰を掴んだ。大きな掌が骨盤をすっぽり包む。指が肌に食い込む。

「入れるぞ」

「待っ——待って——ああああっ♡♡♡♡♡」

一気に半ばまで貫かれた。

指一本しか知らなかったカントに、ヴェルトの太さが押し入る。内壁が押し拵げられ、ぎちぎちに密着した。摩擦。圧迫。奥の壁に先端がこつん、と当たった衝撃で視界が白く弾けた。

「お……っ♡♡ 奥……っ♡♡ 奥まで来て……っ♡♡♡」